

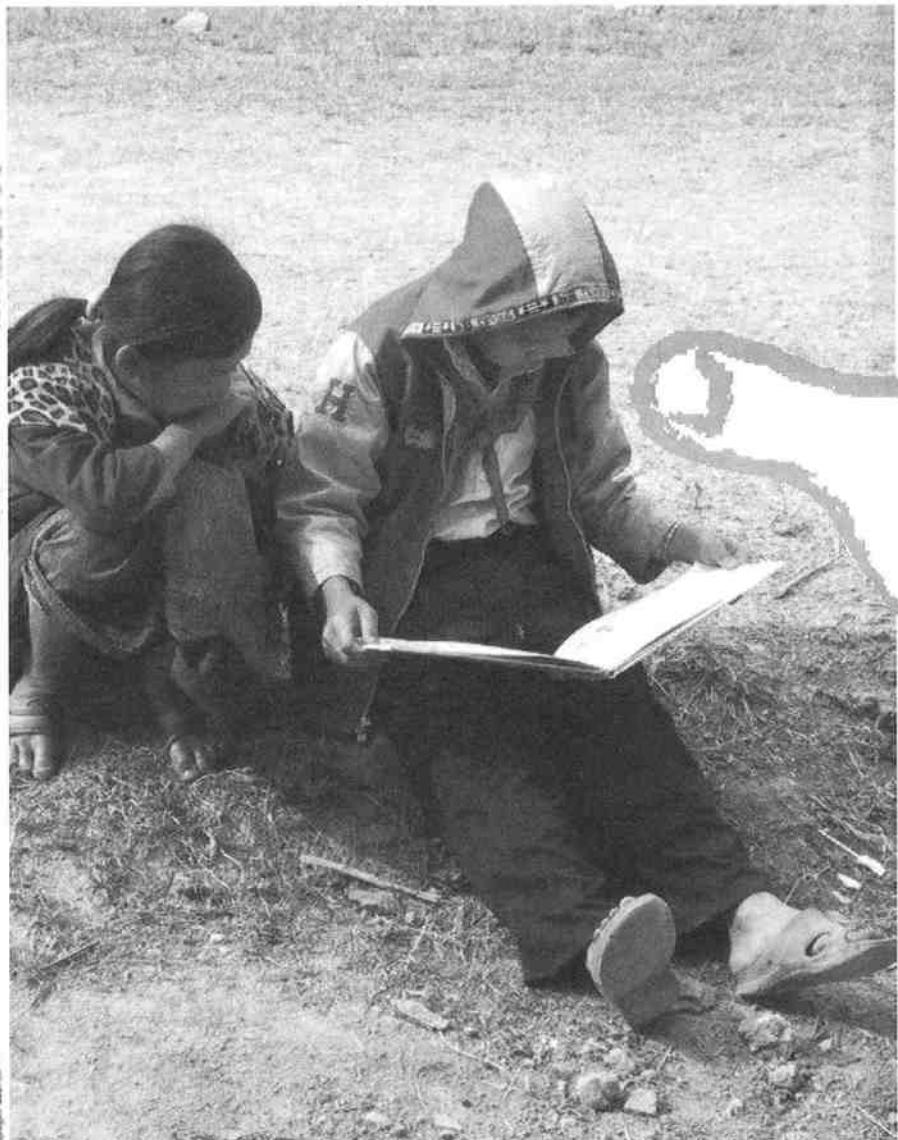
ラオスのこども通信

発行：特定非営利活動法人 ラオスのこども 〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12, 303 TEL/FAX 03-3755-1603

37号
2006年7月発行

特集 ラオスの子どもたちの今 ……2

- ラオスの教育、当時と今（前編） ……4
- 留学生が振り返る 私の小学校のころ ……5
- 小学校の新入生100人の行方 ……6
- プロジェクトの報告 ……7
- 国内活動／インターンが見たラオス ……8
- 事務局より ……10
- NGO ネットワーク ……11
- 活動に参加し支えてくださったみなさん ……12



ふたりは真剣に絵本を読んでいました。ここはルアンパバーン子ども文化センターの裏。図書室から外に持ち出して読んでいたのでした。

ラオスの子どもたちの今

私たちは1982年より活動を始め、来年2007年に25周年を迎えます。多くの方のご支援により、識字活動を中心としたプロジェクトは、現地で成果を上げてきました。

しかし、近年のラオス社会の変化の中、私たちは「ラオスは本当に支援が必要なのか」「なぜ教育に支援しているのか」などの自らに対する問いかけを再度、NGOとして、基本に立ち返って考える必要があると感じています。

特定非営利活動法人ラオスのこどもは、子ども自らが学ぶ力を伸ばしていくために、ラオスで、「絵本、紙芝居などの出版」「図書室」「集い楽しみ学べる場」などの支援を行っています。

ラオスの子どもたちの今

「ラオスは本当に支援が必要な状況ですか?」「なぜ教育に支援をしているのですか?」「寄付金はどのように使われているのですか?」最近、そういった質問を受けます。

こういった質問にお答えしながら、皆様にく(ラオスのこども)の活動をよりよく知っていただくため、3回連続で特集を組むことにしました。

現場を歩く

教材が足りず、読む力がなかなか伸びていかない。

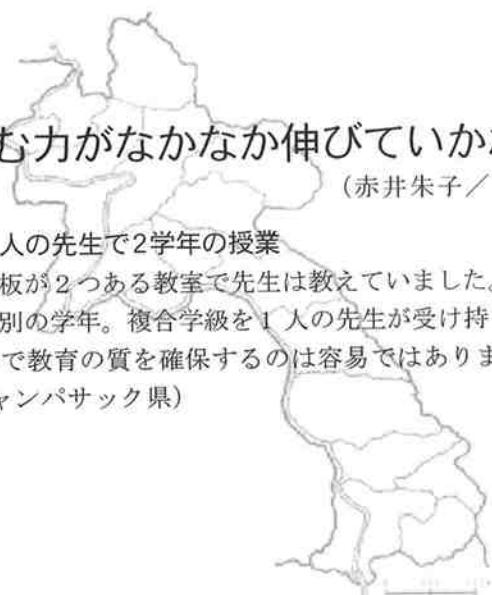
(赤井朱子／ラオス駐在スタッフ)



●1人の先生で2学年の授業

黒板が2つある教室で先生は教えていました。写真の手前と向こう側では別の学年。複合学級を1人の先生が受け持っているのです。こうした中で教育の質を確保するのは容易ではありません。

(チャンパサック県)



●教科書がそろわない

子どもたちは手をあげてしっかり勉強しています。でも、机の上には教科書がほとんどありません。(サラワン県)

2002～2004年、教科書について当会スタッフが71校に聞き取り調査を行いました。ほぼ1人1冊ある(全教科ではない)と回答した学校は8校(11%)で、首都のヴィエンチャンのみでした。

教科書を学校で貸し出しているのは33校(46%)。親が教科書を買う学校は47校(66%)ありましたが、それは全生徒の30%もいません。

貸出や購入をした結果、2～3人で1冊の教科書を使うのが28校(39%)、4～5人に1冊が9校(13%)です。地域によっては、先生以外に教科書を持っていない学校も少なくありません。



●本を手にとって読む機会がない

先生が子どもの横について、絵本を読んでいます。(ボーケオ県)

図書を初めて配る学校は小学3年生でも簡単な絵本をたどたどしく読みます。文字をひとつひとつ指差し、確認をするように声に出しながらゆっくりと読んでいきます。その様子は日本の4、5歳の子どもたちを思い起こさせます。ふだん教科書を手にとってじっくりと読んだことがなかったためと考えられます。

今、ラオスはどんな状況なのでしょうか。第一回目は、ラオスの教育の現状をお伝えします。

スタッフが歩いた教育現場、会が活動してきた25年間や留学生の子ども時代と今も変わらない現実、元日本語教師が感じたラオスの若者の作文力、データで見る就学と落第。これらから浮かび上がる教育の姿を報告します。

●社会的能力を子ども同士で身につけていく

「とぶよっ！」と女の子に人気のゴム跳び。休み時間の校庭で。
(ヴィエンチャン都)

この写真は同級生同士と思われますが、ラオスでは異年齢の子ども集団で遊び、活動するのが普通で、年上の子は小さな子の面倒をごく自然にみます。

ちょっとした諂いを始めて、まわりの子やちょっと年長の子がなだめるとよく聞き分け、しばらくするとまた一緒に遊び始めます。日本なら子ども同士で解決できず、親が出てこないことには収まらないこともあります。地方と首都の格差が広がっているラオスですが、子ども時代に社会的能力を身につける遊び方は変わらないようです。



●大切な本だから

男の子のお尻の下に教科書と本。座布団代わりにするとは！と思い、ラオス人スタッフに耳打ちすると、「大事なモノだからだよ」と言われました。自分のものをしまう場所として、肩掛けカバンをぶら下げたまま授業を受けている子もいますが、カバンを持っていないその子は大事な教科書がなくならないように、一番よい場所として自分のお尻の下を選んだのでした。そして、会が配付した図書箱から借りた1冊の本もありました。 (ヴィエンチャン県)



●首都ヴィエンチャンでは・・・

最近、ヴィエンチャン市内の公立小学校では、児童数が減っているところが少なくありません。私立の小学校へ通う子どもが増えたためです。もちろん、私立校は公立に比べて費用がかかりますが、少々生活に余裕の出てきた家庭で、支払えない金額ではありません。

何より、少しでも良い教育を受けさせたいという親の思いがあるように感じます。私立では、英語や音楽を勉強できるということを宣伝している学校が少なくありません。さらに、放課後、英語学校や学習塾に通う子どもたちも増えてきました。

親が教育に関心を持ち始めた一方、生徒の少なくなった公立小学校では、教員離れが進んでいます。安い給料で学校で教えるよりも、もっと効率のよい仕事が身の回りにあるため、離職してしまう人が多いそうで、残った先生が、1人で3学年をまとめて教えているという学校もあります。

ラオスには支援は必要？

「ラオスの様子を写真で見ると支援が必要なのかなと思う」という声を聞くことがあります。飢餓、戦乱、自然災害など様々な地域の映像と比べると、そう感じるのかもしれません。

ラオスは、激しい空爆を受けたベトナム戦争が1975年に終結して以降、国際社会の支援を受けながら復興に力を注いできましたが、未だに教育は行き届いていません。学校建設は急速に進められていますが、教材、教員の訓練など教育の質はそれに追いついていません。微笑ましい授業風景の写真からは見えない、学力の停滞と初等教育からドロップアウトする現実があります。

子どもたちは学ぶ意欲にあふれています。それに応えることはその社会の大人の責任です。しかし、それが間に合わないのであれば、私たちが協力をすればよいのだと思います。そうすることによって、外国からの援助を必要としない社会の担い手が育っていくことを願っています。

ラオスの教育、 当時と今（前編）

語り手：チャンタソン・インタヴォン

ラオスのこどもは1982年より活動を始め、来年2007年に25周年を迎えます。今号と次号は共同代表のチャンタソンがラオスの教育事情について、活動開始当時とその後の変化について語ります。

——1982年当時の教育状況は？

一言で言えばすごく枯れている感じだった。

首都のヴィエンチャンでも、教科書は先生しか持っていないなくて、暗い教室で教えていた。

先生の給料もすごく少なくて、授業が終わったらさっと教室の外に出て生徒にアイスキャンディーを売って暮らしの足しにしていた。それを見て、すごくショックだった。

ある先生は自分の子どもを学校に連れてきて、教室の軒下にゆりかごをぶら下げて授業をしていた。保育園に預けるお金を節約するためにね。子どもが目を覚ましたら抱っこして、先生が採点する間は生徒たちが面倒を見てと、すごく大変そうだと思った。

——生徒の教科書がないということは、普通の本もなかった？

本なんか全然なかった。まるでない。本当はソ連の絵本が翻訳されていたけど、高かったし数も足りなかつた。

本といっしょに着るものも送ったことも

——地方の様子は？

その当時は、（移動の許可をとったり、交通事情が悪いなどで）私自身、あまり地方へは行くことができなかつた。話によると、着るものもままならなかつたらしい。学校の先生や教育省関係の人には会うと、「毛布も下さい。おもちゃも下さい。何でもほしい」といわれた。要するに先生は給料が少ないので、そういうものも買えない。だから、「少ないけれども先生の足しになれば」と本と一緒に送っていた。送りながらも「たぶ



赤ちゃんを抱えながら教える。それは過去のものではあります。教室の後ろには赤ちゃん用の小さなハンモックがつるしていました。（ヴィエンチャン県／2006年）

ん、一般の子どもの手には届かないだろうね。でも先生や職員の子どもに届くのならいいかなあ」と話していた。

——学校の先生は足りていた？

先生の数は逆に多かったと思う。革命のすぐ後で、ラオス政府も思想を教えるという意味で、学校をたくさん作って、皆が教育を受けられるようにしていた。夜間中学、夜間高校もあった。すごく力は入れていたけれど、先生の給料はなかった。でも先生以外の仕事がなかったこともあるって、先生になる人は多かった。

——少数民族の人たちは？

ヴィエンチャン市内にはほとんど少数民族はいなくて、（戦争中は米国側勢力となっていた）モン族も、元々ヴィエンチャンにいた人達も、革命でみんな逃げた。

教員に給料が出ず、現場は疲れていた

——少数民族に対する教育はどうだった？

地方では思想を教え込むという意味で力を入れていて、盛んにやっていた。一村一校に近い形でやっていた。でも今、地方に行くと、五十代くらいの女性は、ほとんどラオス語がしゃべれない人も多いから、行き届かなかつたんじゃないかな。あるいは男だけ学校へ行かされたのかもしれない。

——大人のための教育が行われた？

町では成人のための識字教育は女性男性に関係なく行われていた。かなり力を入れていて末端まで浸透していた。読み書きができない人はお寺に集められていた。行きたい人が行けばいいという話だったけれども半ば強制で、それをいやがった人たちも多かった。「こんな年になって勉強してどうなる」と、逃げた人たちもいると言っていた。

——小学校も男女平等だった？

男女平等のスローガンを掲げていた。そうはいっても、現実的に余裕のない家は行かせなかつたんだろうと思う。とくに少数民族の中では学校へ行かない子どもも多くいた。

——政府は教育に力を入れていたのに、どうして学校は「枯れて」いた？

先生たちが給料がもらえない、教科書がないという経済的な余裕のなさから学校が寂れていた。一生懸命政府はあおっていたけれども、やる方は疲れていたと思う。それは今も変わらないといえる。

（次号、後編では絵本について話します）

留学生が
振り返る

私の小学校のころ

留学生のオイさん（大学院1年生・23歳）に、ラオスでの彼女の小学生時代について話を聞きました。

学校は楽しかったですよ。子どもがいっぱいいて、休み時間は、みんなで外で走りまわって遊びました。先生も優しかったです。みんな同じ村の顔見知りですから。

本は、教科書以外、読む機会は少なかったですね。田舎に行けば行くほど本を読まなくなる。学校に図書室はないし、近くに図書館もありません。市場には教科書は置いてあっても子どもの読み物はありません。

私はヴィエンチャン近郊の田舎で育ちました。田舎は都会と違って公務員が少なく、ほとんどが農民です。公務員は畠仕事がないから子どもも家の手伝いにあまり時間はとられませんが、農家の子は朝から晩まで田んぼや畠でお米や野菜を作ったりするので精一杯。学校も休まないといけないし、勉強する時間がなくなって、長い間休んじゃったら成績もどんどん落ちちゃってやる気もなくなる。

また、親には、小さいうちは家でお手伝いして、学校に行くのはもうちょっと大きくなってからでいい、という気持ちもあるのでしょうか。小学5年生のとき、15歳くらいの人が2～3割いたし、20歳の人もいました。

ヴィエンチャン
の若者

文章を書いてこなかった

ヴィエンチャンでの「日本語スピーチ大会」に、私が教えていた日本語学校も出場しようとしたときのことです。

まずは日本語で作文を書いてみることにしたのですが、これが予想外に困難なものになりました。

日本語を書く力以前に、まとまった文章を自分で考えて作っていくことが、みんなとても苦手なのです。苦手というよりは書き方自体がわからないという感じでした。

たとえば「私の仕事」という課題を与えると、「私の仕事は会社員です」から、なかなか進みません。やっと筆が進み始めたと思ったら、「私の仕事は会社員です。私の上司はとてもいい人です。私の上司はベジタリアンです。ベジタリアンというのは・・・」と、まるで收拾のつかない文章になってしまいます。また、事実を並べるだけで、自分の考えをその作文の中に入れることができがどうしてもできません。

親に楽をさせようと早く結婚する女の子も

学校に来なくなった友だちは、もし、すごく行きたいと思っていたら、なんとか行かれるようにできたかもしれません。でも、家にはお金がないし、手伝いもしなくちゃいけないし、しょうがないと、受け入れてしまったんじゃないかな。

学校はあきらめても、お寺で勉強を教わる人もいました。お寺の仕事を手伝えばご飯も食べさせてもらいますし。

でも、女の子でそれをしたという話は聞いたことがありません。お坊さんは女性に触れてはいけない戒律がありますから、親も遠慮するのです。

すごく貧乏で兄弟もたくさんいたら、小学校を卒業するよりも早く結婚して（ラオスでは婿を取る）、自分の親に楽をさせようという女の子もいたと思います。逆に男の子は、あまり早く結婚しないで家族を支えないといけない。田舎では今も状況は変わらないのではないかでしょうか。

（インタビュー：山本功子
／ボランティア）



（イラスト：勝占紀子／ボランティア）

学校で書いたことがない

「こんなふうに文を書くなんてラオス語でもやったことないのに」と、最初から投げ出してしまった生徒も少なくありません。その日本語学校は私立ですから、生徒のほとんどが裕福で、高校卒か高校生でしたが、大変な苦労をします。

話を聞くと、学校の授業は暗記や計算が中心で、何かを創作するなど表現活動の時間は重要視されていないようです。

また、本は身近な存在ではなく、お金があるなしに関わらず、親や先生に本を読んでもらったり、自分で読んだ経験はほとんどないようでした。

街に車やきれいな店が増え、豊かになった首都ヴィエンチャンで、携帯電話を持ち、タイの今風の服を着て、タイのテレビを見ている若者たち。そんな刺激に囲まれる彼らのこれからを、とても不安に思ったことを今でも覚えています。

（黒古真由／スタッフ）

プロジェクト の報告

出版プロジェクト

『大きなニワトリ』

作：サーシャ 絵：タータオ
14.5 × 21 cm 65 頁
全カラー
5,000 部（うち 3,000 部 JICA 草の根技術協力事業）

カラフルな絵と簡単な単語で構成した小学校低学年向けの、オリジナル創作絵本。水色の馬、縞模様の水牛などが登場し、大きなニワトリとニワトリが抱える大きなタマゴを見守る・・・ちょっとおかしなファンタジー。



『こんな先生になりたい』

14.5 × 21 cm 144 頁 表紙カラー
5,000 部（うち 3,000 部 JICA 草の根技術協力事業）

学校教員が自らの「人生」をテーマに、中高生が「理想の先生」をテーマに書いたエッセイ集。2004 年教育省主催のコンテストで選ばれた優秀作品、全 20 点を掲載。

教員の部第 1 位の作品は、シェンクワン出身のモン族の男性の一代記。代用教員からスタートし、後に教員養成校で学び、民族学校で教えるうちに教育の重要さを再認識し、最後には自分の村に戻り、学校を作り、校長になるまでを描いています。中高生の部第 1 位の作品では、セ考ーン県の女子学生が、生徒と共に身体を動かしながら、様々な活動をする理想の教師像をいきいきと書いています。

読書推進プロジェクト

読書推進運動自立に向けて、
教員養成校に読書指導の科目設置へ
3月 13-15 日（3日間） ヴィエンチャンにて

（ご支援：（財）国際開発救援財団）

読書推進活動の普及と自立に向けた 5 年間のプロジェクト「読書推進運動 教員養成校における人材育成事業」を締めくくる評価会議を行いました。

ラオス全国の学校で読書の習慣が行き渡るには、先生が読書の大切さを理解し、指導する技術の習得が重要です。そこで当会は次のような様々な取り組みをしてきました。

①教員養成校（全国 8 校）の図書館司書や講師に、読書指導の授業の研修を行う。②教員養成校に子ども向け図書を寄贈する。③司書や講師が読書指導の教科書／指導書を編纂する。④カリキュラムに読書指導の科目が組み込まれるよう教育省に働きかける。

教科書／指導書の編纂は、いかに実践的なわかりやすいものにするかで、苦心しました。

カリキュラム化は、ここ 1 ~ 2 年以内に実現する見通しで、非常に大きな成果といえます。

一方、課題の一つは、教員養成校の講師が異動となる場合への対応です。また、新人先生の赴任先の校長が読書指導に理解があることも重要です。引き継ぎと卒業生へのフォローをよくすることがカギとなります。会としては、それぞれの現場の意欲が保たれるよう、図書の補充こそが重要な役割であると考えています。

（森透）

子ども文化センター(CCC)スタッフ向けセミナー

5/3-5（3日間） パクライ CCC にて

（ご支援：株式会社損害保険ジャパン）

設立 10 年を超えた CCC では、これまで CCC に通っていた子どもたちが若手ボランティアとして育つてきている一方、人事異動などにより、設立に関わった館長やトレーニングを受けたスタッフが入れ替わり、活動の質が低下する問題が出てきています。そこで、改めて CCC スタッフ向けのセミナーを開催することにしました。

参加者が理解しやすいよう、視覚教材を利用しながらセミナーを進めました。初日は図書の貸し出しや補修など、2 日目は本の紹介、読み聞かせ、語り、紙芝居の実演など読書推進活動に重点を置く内容としました。3 日目は、小学校へ行き、実習を行いました。これらの読書推進活動は、実際に CCC で行われている活動です。

今回のセミナーは参加者の意識も高く、セミナー後のアンケートの結果では、図書について、読書推進活動についての理解度は高かったです。参加者は、CCC で活動を実施できる能力・可能性を持っていることを実感できました。

（ミンクワンカム／ラオス事務所）



セミナーでの紙芝居の実演

国内の活動

2006年3月～5月

●ラオスのお正月 「サバイディー・ピーマイ06」 開催

4/22 ライフコミュニティ西馬込（大田区）

今年は、なぜ私たちはラオスで活動を行っているのかを知つてもらい、そしてどんな活動をしているのかを、参加される方々に実際に体験して頂けるよう、会場内に体験コーナーを設けました。また、料理はワンプレート形式にし、どなたも全種類の料理を味わって頂けるようにしました。来場者75人とボランティア39人、ラオスからの留学生17人の計131人が参加しました。ご来場、ご協力ありがとうございました。収益金はラオスでの教育支援活動のために大切に用いさせて頂きます。また、ご協賛、ご後援に心から感謝申し上げます。

協賛：キッコーマン株式会社
キヤノン株式会社
特定非営利活動法人大田教育支援の会
後援：ラオス大使館



インターンが見たラオス 好奇心旺盛で飛びつくように興味を示した子どもたち

大学の研修で“途上国における教育環境とその課題を知る”ため、06年2月、ヴィエンチャンに行きました。

渡航前は、途上国の深刻な教育事情を学ぶにつけて、それ自らの当たりにするのは少し怖いとさえ思っていました。経済的な貧しさ、教員不足、教員を育てる十分な環境が無いなど様々な理由で発展途上国の人々は教育の機会を奪われています。世界の約10億人が読み書きできず、その大部分が女性です。母親が文字を読めなかつたためにミルクと間違えて農薬を赤ん坊に与え、死なせてしまったという事例が数多くあります。“物事を知りたい、理解したい”ということは人間に普遍的に与えられていることです。しかし、それをする手段がない、選択が無いことは貧困へとつながり人間の生死を分けることにもなるのです。

こうした否定的な状況を思い描いて訪れたラオスでしたが、小学校や子ども文化センター（CCC）で出会った子どもたちは、全く別のものを私にぶつけてくれました。

イベントボランティアに参加しました!

初めて参加したピーマイは、とても盛況でした。当会にとってピーマイの意義はいろいろあるでしょうが、やはり大きな目的の一つとして、普段、活動の現場に直接参加できない賛助会員その他多くの支援者に、感謝の気持ちを表すと同時に、書面の報告だけでは読み取れない生きた活動経過を身近に感じてもらうことがあるのだろうと思います。

当日の会場は、ビデオによるメインステージでの活動説明を始めとして、絵本、紙芝居或いはラオ語教室等多彩なコーナーが設けられ、ご来場の皆さんに充分に理解し、また楽しんでもらえたのではないでしょうか。

私自身は新米のボランティアのため、準備、本番ともとてもお役に立てる状況にはありませんでしたが、パーティを通して、初めて「ラオスのこども」の全体像に触れる機会を得たことが大変勉強になりました。

それから、もう一つ印象に残ったことは、当日、多くの学生ボランティア、ラオスからの留学生の皆さんの参加があったことです。これは、今後のラオスの教育支援活動に向けて大きな励ましとなります。

（福島孝好／ボランティア）

子どもたちは皆とても好奇心旺盛で、どんなものにも飛びつくように興味を示しました。目を輝かせ、言葉の壁がある中でも一生懸命に私たちがしようとしている遊びに耳を傾けてくれました。

小学校は、十分な教室や教科書などが確保できていないなど、問題はあります。しかし、子どもたちは目の前にあるものを十分に活用し、自分たちの学びたいことや吸収したいことを取り込み、学習を通して生まれる仲間との共同意識の中で自己を確立させていました。彼らの目は決して忘れることができません。また、途上国も国によって抱えている問題が全く違うことを実感しました。

私たちが一冊の絵本をラオスに送ることによって、あの時出会った笑顔が見られるのだと思うと嬉しくてたまりません。「学びたい」という輝く瞳がそこにあるのだから、私たちは学べる環境をつくる支援を続けていくべきだと思います。

（坂本良子／インターン）

イベント

●ラオスを知る3日間

「ラオスと私たち」

～講演会&絵本のラオス語訳貼り～

5/3-5 JICA 地球ひろば（東京都）
長年ラオスを見続けてきた3名より、様々な角度からラオスについてお話をする講演会と日本の絵本へのラオス語翻訳貼りを行いました。

5/3 「ラオスのこどもたちと日本の私たち」 近藤知子

当会の活動紹介と質疑応答を行いました。質疑応答では、様々な質問が出て、とても有意義な時間となりました。講演会には17名が、絵本貼りには5名がご参加下さいました。

5/4 「国連ミレニアム開発目標とラオスの子どもたちの状況」 森透

国連ミレニアム開発目標（MDG）を確認しながら、MDGを踏まえて当会が行っている活動の説明を行いました。講演会には17名が、絵本貼りには6名がご参加下さいました。

5/5 「ラオスの女性たちと織物」 チャンタソン・インタヴォン

ラオスの織物とそれをつくる女性たちについて話をしました。ラオスの留学生が伝統舞踊を披露してくれました。講演会には23名が、絵本貼りには7名がご参加下さいました。



ラオス語絵本プロジェクト

日本の絵本にラオス語翻訳を貼つて、ラオスの子どもたちに届ける活動です。

●住友商事株式会社

4/13 ラオスの子どもに絵本を送ろう！
社員の皆さんのはか、中央区民の方など、約40人が参加し、約70冊の絵本ができました。チャンタソンによるラオスの教育事情についての話、図書袋での絵本の展示、手芸品等の販売も併せて行いました。ラオスのお菓子であるタマリンドキャンディーとバナナチップを食べながら、皆さん一生懸命翻訳シート貼りを行っておりました。予想以上の絵本ができあがりました。



●オムロン株式会社

5/10 社員ボランティアデー

創業記念日に社員ボランティアとして、絵本にラオス語翻訳を貼る活動に取り組んでくださいました。40冊の絵本ができました。



(イラスト：勝占紀子 / ボランティア)

展示会

●ラオスの絵本展

「ラオスのこどもと絵本」

4/30-5/7 JICA 地球ひろば（東京都）
活動紹介のパネル、当会が出版したラオス語絵本、図書袋、ラオスの子どもたちが描いた絵などを展示しました。

共催：独立行政法人国際協力機構
展示協力：特定非営利活動法人大田教育支援の会



●ラオス展 「ラオスの絵本と織物」

5/9-5/21 JICA 地球ひろば（東京都）

半分のスペースは引き続き上記の展示を行い、半分のスペースでは、ホワイホン職業訓練センターの活動紹介とセンターで制作した織物、ポーチなどの展示を行いました。

共催：独立行政法人国際協力機構、
ホワイホン職業訓練センター
展示協力：特定非営利活動法人大田教育支援の会



事務局より

■ 2006年度通常総会

活動会員による意思決定の場です。2005年度活動報告と決算の議決、2006年度計画と予算の報告を行います。賛助会員は、議決権はありませんが、発言はできます。会員交流の機会でもありますので、ぜひご参加ください。詳細は、同封のチラシをご覧ください。

日 時：9月9日（土）13:00～17:00
場 所：馬込区民センター2F 第一集会室
(今年は会場が変わります!)

■ 新人スタッフのあいさつ

はじめまして。4月からラオスのこどもの事務局スタッフとして働き始めました黒古真由です。去年の9月までラオスのヴィエンチャンで2年半日本語教師として働いていました。まだ、何かと未熟なところも多く、みなさまに迷惑をおかけしてしまうことも多々あるとは思いますが、ラオスのこれからを思う気持ちちはだれにも負けないつもりですので、どうぞ、末永くよろしくお願ひします。

（黒古真由）

■ 入会のご案内

本会は、法人格取得に際し、会員制度を導入しました。今まででは、積極的な意思表示がなくとも、ご寄付を下さったり、ピーマイのイベントにご参加下さったりした方々は、賛助会員とさせていただいておりました。しかし、活動を安定化させるためには、会員制度を明確にしていった方がよいという議論の中で、運営会議での話し合いを経て、新しい年度となる2006年7月から会員制度を変更することになりました。

新しい会員制度では、申込書の送付と年会費の納入という入会手続きが必要となっています。ぜひ、ご入会をお願いします。詳細は、事務局までお問合ください。

「活動会員」：理念を共有し、積極的、継続的に活動及び運営を支えていく人。総会での議決権を持つ。

年会費：学生3,000円 一般5,000円

期間：入会された月～翌年6月

「賛助会員」：資金支援を基本に、会の活動を継続的に応援する人。総会での議決権はない。

年会費：一口5,000円以 期間：入会された月から1年間

郵便振替 00140-6-462494 「ラオスのこども」

～いただいたご寄付・会費の使われ方～

ラオス語図書の出版



運営資金として

実際に活動を行っている
ラオス事務所と東京事務所
の運営資金として
活用させていただきます。

読書推進プロジェクト

- 図書配布プロジェクト
- 学校図書室プロジェクト



子ども文化センター支援

人件費や講座などの運営に
用いさせていただきます。



ご寄付 会費



人材育成のために

教員に対する読書推進セミナー
や絵本づくりのワークショップ
などにかかる経費として活用さ
せていただきます。

（イラスト：勝占紀子 / ボランティア）

<ラオス事務所の動き>

3月

- 3/6 Japan NGOミーティング(JANM)出席(赤井)
3/13-15 教員養成校読書推進事業 評価会議(森、赤井)
3/17 事務所スタッフ会議
3/18 ボリカムサイCCC訪問
3/22 ラオス高校生エッセイコンテスト
スタディツアー受入
3/27 赤井一時帰国～4/24

4月

- 4/26 Japan NGOミーティング(JANM)出席(赤井)
4/13-17 ピーマイ(ラオス正月)休暇

5月

- 5/3-5 CCCスタッフ研修<サイヤブリ県パクライ市>
5/16 Japan NGOミーティング(JANM)出席(赤井)
5/17 International NGOミーティング出席
(ミンクワンカム)
5/25 事務所スタッフ会議
5/31 子どもの日フェスティバルに参加
<ヴィエンチャン都ハッサイフォン区>

※ HA=学校図書室(ハックアーン) TTC/TTS=教員養成校
CCC=子ども文化センター CEC=子ども教育開発センター

<東京事務所の動き>

3月

- 3/4 活動説明会
3/12 理事会、運営会議
3/12-21 森、ラオス出張

4月

- 4/9 理事会、運営会議
4/10 通信36号発行
4/13 住友商事(株)でラオス語絵本づくり体験
4/19 和光大学インターンシップ祭り(赤井)
4/22 サバイディー・ピーマイ06
4/30 JICA地球ひろばでラオス語絵本を展示
～5/7

5月

- 5/3-5 JICA地球ひろばでラオスを知る3日間を開催
(近藤・森・チャンタソン)
5/6 活動説明会
5/9 JICA地球ひろばで、ラオス語絵本・織物を展示
～5/21(ホワイホン職業訓練センターと共に)
5/10 オムロン(株)でラオス語絵本づくり体験
5/14 理事会、運営会議/ピーマイ打ち上げ
5/23 大田区国際交流団体懇談会に出席(黒古)
5/27 スタディツアー説明会

----- NGO ネットワーク -----

「援助の仕方」をめぐる議論

教育に関わるNGOが25団体と広島大、お茶の水女子大が参加し、当会が運営委員を務めるJNNE(教育協力NGOネットワーク)の活動の一つに、外務省、JICA(国際協力機構)など政府系援助機関と情報や意見の交換をする機会があります。ここで最近話題に上っているのが、「援助の仕方」が変わってきている世界的なトレンドについてです。

世界の国々は1990年に「すべての人に教育を(EFA: Education For All)」と宣言し、その達成のため、途上国自身の努力とともに援助国の貢献が求められています。これまで援助国は、学校建設や教員養成など、個々にプロジェクトを実施していました。

ところが、それでは援助を受ける国の行政機関が、個々に対応しなければならず、報告書作成をはじめ膨大な事務作業に追われて事務コストがかかり過ぎ、かつ援助国側主導となっていることの問題が指摘されるようになりました。

そこで、1つの国への各国からの援助は一まとめにして、その国の財務省が受け取り、そこから教育

省へ、現場へと配分していく方式が、その国の主体性が發揮され、合理的であるとして、徐々に採用されるようになっています。すでにタンザニアは、その方式に徹し、個別のプロジェクトは受け付けないようです(ラオスではそういう話はまだ聞きません)。

懸念されるのは援助が現場にちゃんと届き、裨益すべき対象に有効に遣われるのか、という点です。EFAの達成には、現場の先生の意欲と意識と能力が高まり、教育の質が向上することが不可欠です。それなしには、学校からドロップアウトする子どもは減りません。

援助のこうした新しい潮流に対して、日本のNGOがめざしてきた現場主義は、ますます重要になっているといえます。現場の担い手が成長してこそ、教育の質は確保され、持続可能になります。そして、今まで日本のNGOの弱みであった、現場で得た知見を意思決定機関に提言することこそが今後の大きな役割となってくるでしょう。

(森透)